

第1章 一宮市の農業に関する概要

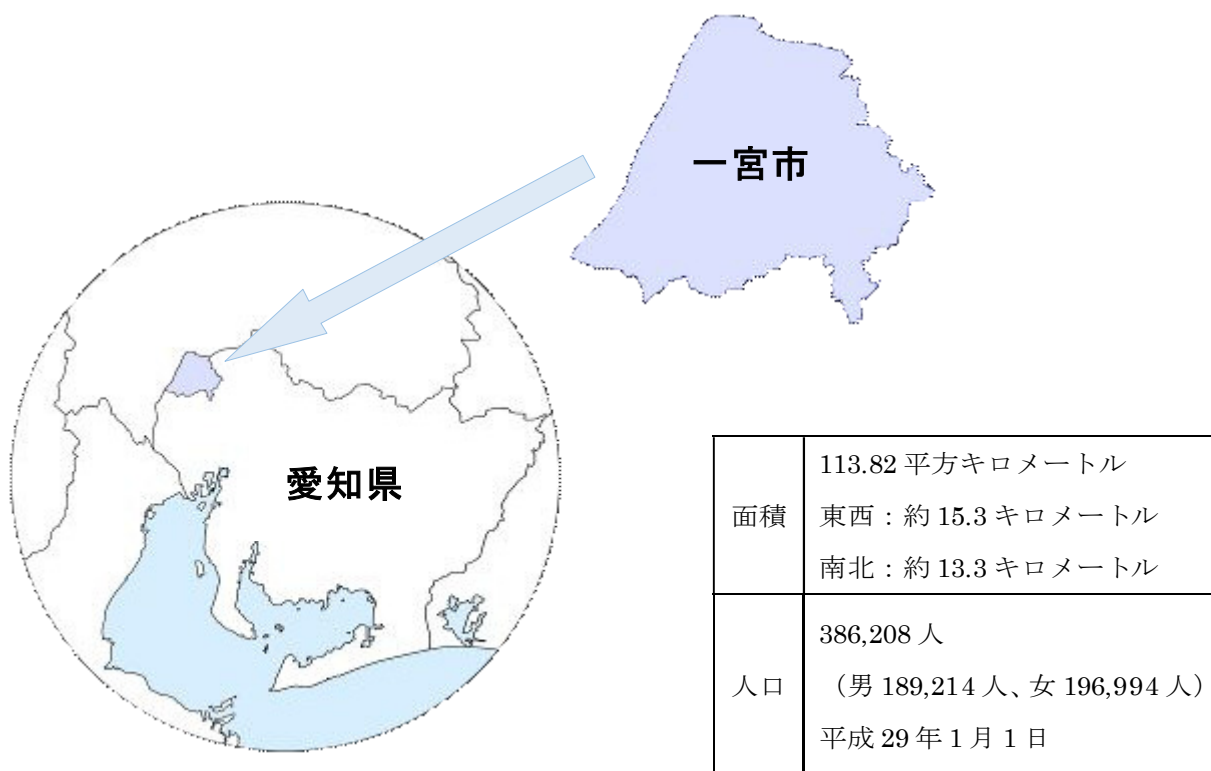
1. 一宮市の地理的条件

一宮市は、愛知県の北西部、木曾川によって形成された扇状地にあり、濃尾平野のほぼ中央に位置しています。また、愛知県と岐阜県の県境となっている木曾川が、市の北部から西部にかけ約18kmに渡って流れています。

平成29年3月現在、一宮市内には名神高速道路と東海北陸道路のインターチェンジが4ヶ所と一宮ジャンクションがあります。東西の大動脈である東名・名神高速道路と、太平洋側と日本海側をつなぐ東海北陸自動車道の結節点として重要な位置にあり、さらにJRや名古屋鉄道の駅も多数あります。

一宮市ではこのような地理的条件の中、豊かな水と土壤に恵まれ、古くから稲作・野菜園芸・養鶏などが盛んに営まれてきました。

平成17年4月1日、一宮市は、一宮市・尾西市・木曾川町の2市1町が合併した人口約37万人の市として新たなスタートを迎え、現在の人口は38万人を超えています。一宮市では、この交通の便の良さを生かした都市近郊型農業として、多種多様な農業が営まれています。

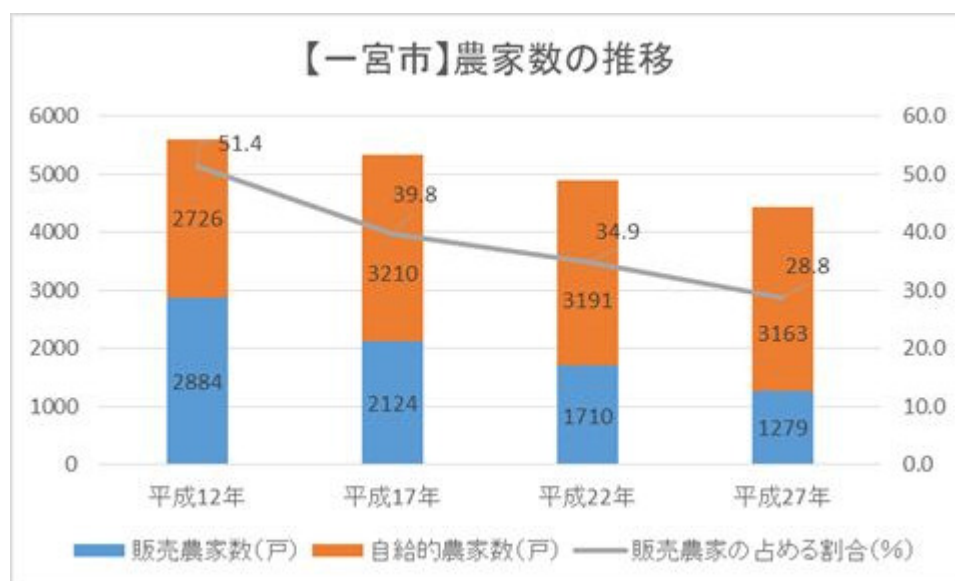


2. 農家数

一宮市の総農家数は、平成12年（2000年）から平成27年（2015年）までの15年間に、5,610戸から4,442戸へ20.8%減少しました。

また、一宮市の販売農家数は、同様の15年間に半数以下（2,884戸→1,279戸）に減少しています。その一方で自給的農家数は平成17年に微増し、その後減少に転じています。

一宮市における総農家数に対する自給的農家の割合は、平成12年のデータでは48.6%、平成27年のデータでは71.2%となっています。



一宮市では、以前から自給的農家の割合が愛知県や全国の値と比較してかなり高く（*）、平成12年では約半数、最新データの平成27年では7割以上を占め、販売農家の占める割合は年々低くなっています。

この農家数（総農家数及び販売農家数、自給的農家数）の減少と自給的農家が占める割合の増加から、一宮市において家業として農業を行う販売農家の廃業や規模縮小で自給的農家に転じる農家が増えていることが読み取れます。

この農家数減少を食い止めるためには、新たに農業に取り組む人を増やすことや、持続できる農業のビジネスモデルの構築が必要です。

*愛知県・全国の農家数等データ・各種定義等は、資料編 P29～をご覧ください。

3. 経営耕地面積

経営耕地は、「自ら所有し耕作している耕地」と「他から借りて耕作している耕地」の合計です。土地台帳の地目や面積に関係なく、実際の地目別面積としています。

一宮市の経営耕地総面積は、平成12年から平成27年までの15年間で、33.3%減少しました。そのうち、田については22.4%、畑については56.3%の減少となっています。



一宮市における田の経営耕地面積の減少率（平成12年から平成27年）は、愛知県とほぼ同じです。また、一宮市の田の耕地面積は、平成12年から平成17年に大きく減少し、平成22年以降微増しています。

一方、畑に関して一宮市は、減少割合が県と比較してもかなり大きく、耕地面積の減少が続いています。

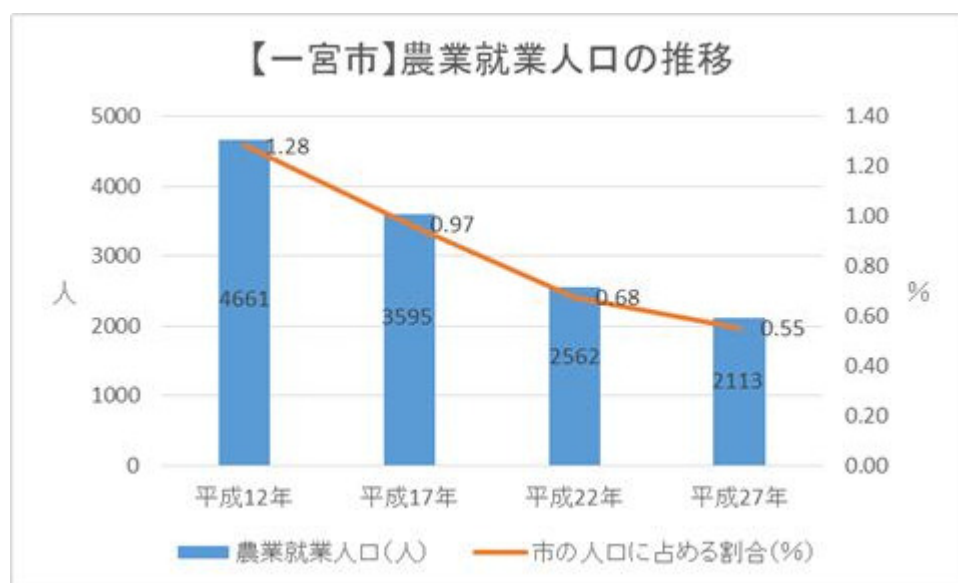
一般的に、田の作業は、ここ数十年の間に機械化や効率化、それから栽培技術の省力化が大きく進んできました。それと比較して、畑の作業は、人の手で行うことが多いといわれています。

畑の経営耕地面積の減少の背景には、農業者の高齢化と後継者不足等が影響していると考えられます。

4. 農業就業人口

農業就業人口とは、「仕事として自営農業のみに従事した者」と「農業とそれ以外の仕事の両方に従事した者のうち農業が主の者」を合計した人口です。

一宮市では農家数の減少に伴い、平成12年から平成27年までに農業就業人口は半数以下（4,661人→2,113人）まで減っています。県や国の農業就業人口も大きく減少していますが、その減少率は50%までは達していません。



国・県の農業就業人口の減少割合と比較すると、一宮市の方が大きく減少しています。また、市の人口に占める割合においてもかなり落ち込んでいます。

ここまでのデータで、販売農家数・経営耕地面積・農業就業人口、すべてが減少していることから、今後、農業を仕事として営む就農者の育成が課題の一つとしてあげられます。

さらに、経営耕地面積と比較して、農業就業人口の減少が大きいことから、個々の担い手に対する負担は増えていると考えられます。

そのため、これからの農業を支え、現在の農地を維持するためには、ICT（情報通信技術）の導入や分散した土地の集積など、効率的な農業経営が必要となっています。

5. 農畜産物の生産状況

【米・麦・大豆】

愛知県内では、大粒で甘みがあり、あっさりとした口当たりが特徴の「あいちのかおり」が水稲作付けの約4割を占め、最も多く作られています。

一宮市は、この「あいちのかおり」の主な産地です。また、農薬や化学合成肥料の使用を控え、有機肥料としてレンゲを活用した「特別栽培米あいちのかおり」も広く栽培されています。

多くの作業を必要とする米づくりは、トラクターや田植機、コンバインなどの大型機械の登場により、かつては人が行っていた作業の一部が効率化されました。今後もGPS（衛星利用測位システム）を利用した自動運転技術の導入など、熟練技術が求められる機械の省力化が進み、米づくりはさらに変化していくことが予想されます。

また、麦と大豆は、元々畑の作物ですが、米からの主要な転作作物として、水田でも作付けされています。一宮市内での栽培はごくわずかですが、県内においては、麦は製麺に適した品種の「きぬあかり」、大豆は豆腐に適した品種の「フクユタカ」が主に栽培されています。



【野菜】

一宮市は、木曾川によってもたらされた肥沃な土壌や温暖な気候、大きな消費地が近い条件を活かして露地(野外)での野菜づくりが昔から盛んな地域となっています。古くから、露地栽培以外にも、ビニールハウスやガラス温室を使った施設での野菜づくりも行っています。

施設の中には、ICT(情報通信技術)を用いて、適切な温度管理等を行い、作業の効率化や適切な栽培技術の可視化、天候に左右されない収量の確保などを目指すものも出てきました。これにより、長い経験則に基づく判断の一部をノウハウとして活用し、経営者だけでなく後継者・新規就農者・被雇用者なども効率よく農業を営むことが可能になります。

一宮市では、多種多様な野菜が一年を通じて栽培されています。その中でも多く出荷されるナス・ネギ・ダイコン・ハクサイには、各種野菜の栽培や規格等を定め、農産物を共同で出荷する「部会」という団体があります。この部会を通して共同で選果し、箱詰めや出荷を行うものを「共選」と言います。

愛知西農業協同組合では、まとまった量を確かな品質で取り引きできる共選出荷を行う部会の育成強化に努め、各種野菜の産地を維持・拡大するとともに、農産物の品質向上と規格化の徹底を図っています。また、小規模の農家に対しては、産直店での直接販売を推し進めています。



【花き】

「花き」とは、くらしを飾る花や緑の観賞用の植物で、具体的には、切り花・鉢もの・花木類・球根類・花壇用苗もの・芝類・地被植物類のことです。

名古屋という大消費地を擁する愛知県は、かつての尾張藩で茶道や華道が流行した文化的な背景もあり、花づくりが盛んな地域です。昭和37年（1962年）以降、愛知県の花きの農業産出額は、全国一が続いており、「花の王国あいち」として一大産地となっています。

その愛知県の花き栽培面積の7割以上を占めているのは切り花類ですが、一宮市においては、ガラス温室やビニールハウスなどの施設を利用した花壇用苗ものを中心に、デンファレ・ヒマワリ・バラなどの切り花や植木など、一年を通じて非常に多くの種類の花きが出回っています。特に花壇用苗ものは、首都圏や関西圏へも良好なアクセスができる立地条件を生かし、全国展開を図っています。

花きの市場は、景気や消費者の動向に左右され、季節に応じたイベントへの対応や新しい品種が常に求められます。そのため、経営の安定には、多種類の花きの栽培を行うことが不可欠です。



【畜産】

一宮市では、牛・豚・鶏・蜂など、古くから栽培されてきた農作物を利用した畜産や、農業を営む際に活用するための畜産が営まれてきました。

特に養鶏は、大消費地にも近く、出荷の輸送技術の向上や県内にある港から飼料が比較的好条件で入手できたこともあり、畜産の中でも、特に盛んで身近な農業経営の一つでした。

一宮市東部の千秋町では、かつて個々の農家が養鶏の専門農業協同組合を設立していましたが、現在は株式会社となり、周囲への環境負荷の少ないウィンドレス鶏舎で、温度・光量・給餌・集卵等が適正管理されています。厳しい衛生基準に基づく一括生産による養鶏は、尾張地域最大の約 18 万羽の飼養羽数を持ち、毎日 16 万個の卵を生産しています。

一宮市における現在の畜産は、都市化の進展の影響を大きく受けています。またその一方で、消費者からの良質で安全な畜産物の供給に対する期待は、非常に高くなっています。

これからの畜産経営には、従来の良質で安全な畜産の飼育はもちろん、国産畜産物の需要に応える確かな品質と生産力、それから国際間競争を勝ち抜くブランド化や収益力の強化を図ることに加え、今まで以上の衛生管理や防疫体制の徹底など、変化し続ける環境への柔軟な対応が必要とされています。

